

野澤房敬氏逝去さる

我國工事技術界の隠れたる指導者

野澤房敬氏は宿痼の腎臓病に喘息を併發して、去る十月三十日市内田園調布の令息房敏氏の宅に於て遂に逝去された、享年七十三歳である。

野澤氏は舊幕臣で幼少時代徳川公と駿府に住つた事もあつた、明治二十一年東京大學の土木科を卒業して、滋賀縣に奉職し、後に群馬縣廳に轉じたが、二十四年山陽鐵道會社に入り、次いで九州鐵道會社に入り、以來三十二年まで鐵道建設及び保線技術に關し盡力する處甚だ多かつた。

明治三十二年當時の機械輸入商として我國の代表的實業家であつた高田商會に聘せられて其のロンドン支店に勤務する事となつた。而して三十五年歸朝するまで氏の在英生活は長くはなかつたが、氏の溫厚なる性格は英國風の技術生活に最も重大な感化をうけられた様である。其後サミュエル商會其他の外人會社に關係して歐米に出張する事はあつたが、氏の風格は依然として英國風の紳士であつた。

其後野澤氏は民間土木業者の顧問として早川組に聘せられ、亦土木業協會に聘せられ、最後に西松組の顧問として聘せられ、業界の爲に常に先進的指導を與へてゐた。

野澤氏は先年逝去されたる土木學會の元老石橋絢彦博士と同様に、晩年に至るまで土木技術界の爲に筆を離さなかつた人である。此點は實に野澤氏の最も偉大なる點であつて、隠れたる指導者として我々は此老技術家に敬

虔の念大なるものを感じるのである。

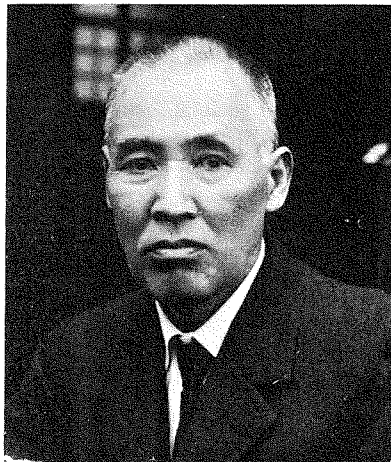
野澤氏は常に我國の工事技術の合理化と言ふ點に多大の關心を持つてゐられた。之が爲には常に讀書と研究とを怠らず、著書の如きも混凝土に關するもの、機械設備に關するもの等數種あるが、既に數十年前より日本工學會誌等に發表せられたる論文の如き氏の先覺的精神の發露と見るべきである。

野澤氏は青年時代より讀書家であつた爲に英文に非常に堪能であつた、本社の岡崎主幹が二十年前の著たる『土木施工便覽』の序文にも野澤氏の英文が一光彩を添へてゐる。

野澤氏は娛樂的趣味の何物も有しない人であつた。若し趣味と言はゞ歐米の新著及び雜誌新聞を讀む事であつた。晩年には愛孫と花木を愛したるも、之とても讀書執筆の餘暇の事であつた。

野澤氏は死の前日まで著述の筆を離さず、遺稿も二、三種に達する由である、之は何れ遺族の方から適當な時機に出版される事であらうが、斯の如く氏が晩年まで雜誌に著述に常に指導の筆を絶たなかつた事は、老來とかく其爲徒消となり勝な我國技術界に於てまことに尊敬すべき態度であつたと思ふ。

(十一月二十日一記者)



故野澤房敬氏